



東西大学校語学研修の記録

2016/04/02

東西大学校語学研修を実施する意義

■目的

青少年の健全育成に関わる国際交流プログラムを実施し、お互いの国を知り、青少年が同じ視線で物事を理解して行くことが求められています。このプログラムでは、語学を学ぶだけではなく韓国の伝統と文化を通して知識を得て行く事を目的にしています。東西大学校の学生と本校の学生が互いの意見を交換し、相互信頼関係を築くことも最大の目的でもあります。

■プログラム参加学生の達成目標

コミュニケーション運用能力を計ることに重点を置いたプログラムであり成果は、学生がどれだけ多く他の人たちとコミュニケーションを計った度合いで達成目標を計ります。日本での学修環境下ではそれほど多く韓国語と触れ合うことがないことから、このプログラムでは、より多くの人とコミュニケーションを計り、外に向かう力と積極的な態度を育成したいと思っています。

研修後は成果発表会などを行い、資料をととして残すなどデジタル化は出来ないが目的が達成できるように計ることが出来ました。授業の体制は、本校の学生9名であり少人数の中で話す、聞く事を中止に30時間の授業が行われました。授業以外では、韓国伝統文化体験として伝統衣装体験、慶州旅行、キムチ作りなどが行われました。

東西大学校の日本語学科の学生と共に、買い物などに出かけ、親密度を深める事が十分に出来た。参加学生は、高い満足度を持って帰国する事が出来た。小さな目標はあったが、日韓の友情の輪を少しでも広げる事に貢献出来たのではないかと思います。

この号の内容

語学研修を終えて	1
各学生レポート	2
研修資料	3
付録	4

重要な日付

02/11	成田空港に集合でした
02/12	釜山
02/25	思い出の写真

内向化が進む大学の中で

日本の学生に「内向化」が進み、その結果「海外に出ない」「留学は面倒」「わざわざ苦労するのは」という学生が増加傾向にあることが報告されている。確かに、大正大学においても同様の動きや傾向がここ数年見受けられる。特に男子学生の内向化は顕著になっているように思われる。この主な原因は、他大学でも同じであろうが、大学生活の中で時間的な余裕と金銭的な余裕が持てない学生と言語での障壁が、その原因となっているように推察される。しかし、実際に、現地で見ること、聞くこと、触れることで本物を知ることになります。その結果として、このプログラムには、歴史、伝統、芸術、絵画、音楽が欧州の香りがあり、参加する者の満足度は高くなっていると思う。

本校が実施している「東西大学校語学研修」では、東西の学生と交流しながら学んでいくことを大事にしている。



1. はじめに

今回、私は、韓国の釜山にある東西大学校で2月11日から2月25日までの2週間の語学研修に参加しました。韓国の音楽を好きになったことをきっかけに、韓国に興味をもちはじめ、大学入学後に語学研修のプログラムがあると知り、参加したいと思っていました。私にとって今回の語学研修がはじめての海外渡航で、日本を出て、異国の地へ行くという不安な気持ちがありました。しかし、自分が興味を持っている韓国へ行くことへの楽しみの気持ちのほうが強くありました。

2. 研修中の学び

研修では、韓国語の授業が午前中に3時間、午後からは韓国の伝統体験というのが基本のスタイルでした。私たちの韓国語のレベルに合わせた授業内容にしてくださったので、あまり不安を感じることなく、授業に取り組みました。伝統体験では、陶磁器やキムチ作り、釜山の観光地である南浦洞や慶州にある昔のお墓やお寺を見にいきました。その際、東西大学の学生たちが案内をしてくれたのですが、みんな日本語が上手でとても驚きました。

3. 韓国と日本の違い

韓国へ到着して、いちばんはじめに驚いたのは、大学へ行くまでの道が東京では考えられないほどの急な坂だったことです。私たちの韓国語の授業の先生が、釜山では山の土地の費用が安いから、釜山の大学の多くは山の上に建てられると教えてくれました。語学研修に行く前の釜山のイメージは海がきれいな場所と勝手に思っていたのですが、山も多くあると知りました。

次に、韓国の道路では歩行者優先ではないということです。信号が日本に比べて少なく感じ、自動車が来ていないか自分で見極めて渡らないといけない道路もあり、正直危ないと思いました。それにもかかわらず、2週間目には、特に違和感もなく道路を渡っていた私自身も少し驚きました。

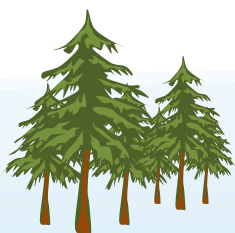
最後に、日本との違いではないですが、地下鉄を利用しているときや釜山の繁華街である西面・南浦洞へ行ったときの周りからの視線を感じたのが今でもとても記憶に残っています。彼らが話している韓国語をまだ理解できなかったのですが、韓国語で日本を意味する일본と言われることが多々ありました。私は韓国が好きで、韓国の文化や生活を知りたいと思っています。しかし、今でも反日の方がいて、私たち日本人を見て何か悪く話をしているのかもしれないと思うと、少し複雑な気持ちになりました。

しかし、私たちに対して優しく接してくれた方もいました。寮の近くにあったコンビニエンスストアの店員のおばさんには、コンビニエンスストアに買い物に行くたびに挨拶や会話を積極的にしていました。はじめは、勝手に怖いイメージを持っていたのですが、話をしていくうちに、優しくて愛嬌がある方だと感じました。日本に帰国する日にちを伝えにいくと、次はいつ釜山に来るの？と言われて、その一言が何故か嬉しくて、また釜山にきたときは、必ずおばさんに会いに来ようと思いました。また、カフェのお兄さんが話しかけてくれて、日本が好きだと言ってくれたことも嬉しかったです。そのとき私たち以外にお客さんがいなかったのも、私たちと話をしてくれていました。学校の先生や学生だけではなく、日本語が全く通じない韓国の方と交流することで、自分が知っている韓国語を実際に使える機会ができました。また、しっかりとした文章になっていなくても、相手に伝わったときの嬉しさを体感できました。

4. まとめ

今回の語学研修への参加は、自分の好きな国をより知ることができ、韓国の良さや日本との違いを感じられる良いきっかけになりました。実際に自分の目で見て体感し、今まで抱いていた韓国への考え方が少し変わったような気がします。また、私の韓国語の力はまだまだで、相手が話している内容を理解し、自分が伝えたい内容をしっかり伝えることができませんでした。そのため、もどかしい気持ちになり、相手の気持ちや伝えていることを理解することが、どれだけ大切かをこの研修を通して改めて実感しました。

2週間の語学研修は、毎日とても充実していて本当にあつという間でした。この研修をきっかけにもっと韓国語を勉強したいと強く思いました。語学力を伸ばすためには、自分がどれだけ貪欲になれるかというのが重要だと思います。そのため、私も韓国語の勉強に貪欲に取り組んで、今よりも韓国語の能力を高めたいです。



2月11日から2月25日まで韓国に語学研修ということで、釜山にある東西大学に2週間ほどお世話になった。私にとって海外は初めての経験だったため、多くのことを感じたと同時に多くのことを学ぶことができた。

まず初めに、日本との文化の違いである。韓国に行くにあたって事前に学んだことや、実際に現地に行って知ったことで1番日本との違いを感じたのは文化や習慣である。例えば、普段の生活には欠かせないトイレである。日本のトイレでは、使用後のトイレットペーパーは水に流すのが通常である。しかし韓国では、使用後のトイレットペーパーは備え付けのごみ箱に捨てるというのが通常であった。この違いは生活する上ではとても大きく、最後まで慣れないものであった。

他には水である。韓国には、空港をはじめ大学にもウォーターサーバーが多く設置されていた。また、その水を飲むコップは日本の一般的な紙コップではなく、三角柱の形をした薄い紙や、ICカードが入るほどの薄い紙で飲むというのが一般的であった。

鉄道を使った際にはさらに様々な違いがあった。その1つは、改札近くや駅構内に駅員さんがいないことである。2週間の滞り期間の中で、何度も駅を使うことがあったが、私は1度も駅員さんを見かけることがなかった。韓国の駅ではどこに駅員さんがいるのかという疑問が残ることとなった。

そして、ホームから改札の間に券売機がないことも日本との違いであると気付いた。日本ではICカードの残高がなくなると改札を通ることができないため、改札を出る前にチャージすることができるよう券売機が設置されているのが通常である。しかし韓国では、1度改札を出ないと券売機がないためICカードの残高には注意が必要だとわかった。また、改札もテーマパークのような回転式のものであった。このように、駅1つとっても日本と大きく違う点がたくさんあることを知ることができた。

この他にも、車のハンドルの位置や走行車線の位置、箸やスプーン等の置く向き、もちろん食べるものも含め、本当に多くの違いに気付く2週間となった。これらの違いが、その国の普通であって、その国の特色なのだとわかった。他国は自国と様々な点で違いがあるが、その国に合わせた行動や生活をするのが、求められると感じた。行った国行った国のルールに合わせることで、その国を理解する上ではとても重要なことであるとわかった。

次に、韓国の伝統についてである。私たちは2週間のプログラムで、陶磁器作りやキムチ作り、韓紙作りや韓服体験など、韓国の伝統に多く触れることができた。韓服とはチマチョゴリのことである。それに対して、日本の伝統的な服といえば着物である。形は全く違うが、両国とも素敵な伝統服があるということを改めて感じる事ができた。

韓国での2週間において、1番大変であり国の違いを感じたことはやはり言語である。言葉が通じない苦しさや思いを伝える難しさを、身をもって体験したのは初めてであった。

東西大学の学生は日本語を理解してくれることが多く、自分の語学力の無さを助けてくれた。そんな中でも、わかる単語を組み合わせて会話にしようとすることで、国を超えた友達関係を築くことができた。日本語と韓国語を、お互いにわかる単語を使って思いを伝えようとするので、すべてが伝わらなくても気持ちが伝わるということを学んだ。

母国語以外を習得することはとても難しく、短期間で簡単にできるものではないと思う。しかし、2週間数多くの会話を交わしたことで覚えることができた単語はたくさんあった。この経験から、テキスト上で勉強して言葉を覚えるだけでなく、人と人のつながりを通して言葉を学んでいくことの大切さを感じることができた。

また言語だけでなく、現地の方々の優しさをたくさん感じる事ができた2週間であった。街に出た際、道がわからないことが多く、自分で調べてたどり着くには限界があったため、近くにいる人に聞く機会がたくさんあった。ほとんど韓国の方を頼りにしてたどり着くこともしばしばあった。しかしそれは、私が聞いたことに対して、丁寧に優しく親身になって教えてくれたからできたのである。見知らぬ外国人で、韓国語もままならないような私に対して、話しかけた全員が本当に優しく対応してくれた。韓国と日本の関係性が問題となっている部分もあるが、一人一人とても温かく、本当に素晴らしい国であることを改めて確信した出来事であった。

以上これらのまとめとして、日本から海外に出て感じたことや国際的な視野に立ち感じたことである。

韓国に着いたとき、集団で日本語を話す私たちは完全に日本人であり、韓国の方から見れば外国人である。どんな場面においても、韓国にいれば私たちは外国人であるため、その自覚を持たなければいけないと常に感じていた。日本人として、日本の代表として、恥ずかしくない行いをしなければいけないという責任感があった。よって海外では、日本のイメージを悪くしないためにも責任ある行動を心掛けることが大切であると感じた。

そして重複してしまう部分もあるが、国と国の関係よりも人との関係は素晴らしいものであり、何事も国籍は関係ないということを考えさせられた2週間であった。このことから、私がどうすることもできないような政治の問題や国としての問題を、何とか早く解決させる方法はないのかと考えるようになった。国際的な視野に立ったからこそ考えることも、難しい問題が山積みであることを感じさせられた。

今回の2週間は楽しいことはもちろん、文化や歴史、また韓国の現地の方々を知ることができたとても有意義な時間であった。行ってみないとわからないような経験をたくさんして、一回り成長して帰って来ることができたのではないかなと思う。「百聞は一見に如かず」であり、自分自身で感じる事が何よりも大切だと思った。

最後に、今回の東西大学校語学研修に関わってくださった数多くの皆様、そして特に東西大学でお世話になりました多くの先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



私は、この語学研修の中で日本と韓国は似ているようで実は違う所の方が多い別の国であると感じました。日本と韓国は、近い距離にある国である上に歴史的にも比較されてきた国です。2週間という短い期間でしたが、多くの韓国の人や文化に触れて日本と韓国の違いや韓国の良い所を見つけることが出来ました。

まず、私が見つけた3つの日本と韓国の違う点について話します。1つ目は、人の違いです。1番驚いたのは、韓国人は女同士、男同士でも非常に距離が近いことです。街中でも普通に男同士で肩を組みながら歩く人や、女同士で手をつないで歩いている人が多くいました。男女別で外見や内面での違いもありました。韓国の女性の場合、日本人と化粧の違いです。韓国の女性は、肌が白く濃い赤色の口紅の女性が多いです。これだけでも見た目だけで韓国人か日本人か見分けがつくくらいの違いでした。また、韓国の男性の場合、日本の男性のように髪の毛を整髪料などで整えたりする人はほとんどいませんでした。反対に内面の部分では、韓国の男性は皆、紳士です。女性への気遣いやおもてなしがとても上手い特徴もありました。2週間多くの韓国人と触れ合って、韓国人は皆優しいと感じました。メディアでは、さまざまな政治的問題によって日本に対して良い印象を持たない韓国人が多いという情報を聞くことが多かったため不安な部分もありましたが、どこに行っても日本人だからといってひどい扱いや嫌な事をされることもなかったです。むしろ優しくして貰えた印象でした。相手に対して一生懸命接する姿勢の人が多く、とても感動しました。

2つ目は、街並みです。私は、韓国に着くまでは韓国も日本の街並みとあまり変わらないイメージを持っていましたが、それは違いました。韓国には、日本のような一軒家がほとんどなく団地が無数に立っている土地があります。週末の休暇を利用してソウルにも行きましたが、ソウルでも団地が無数に建っている土地がいくつもありました。また、韓国で走っている車は日本のようにさまざまな色ではなく、ほとんどの車が白、黒、シルバーでした。さらに、韓国の夜も日本とは違いました。韓国では街の中心地に行くと夜は、屋台が毎日行われ、とても賑わっています。日本では夏のお祭りの時しか出ないような屋台が毎日行われていることにも驚きました。

3つ目は、食事です。日本人は、日頃からよく洋食を食べるが、韓国人は韓国料理をよく食べます。飲食店もチェーン展開された韓国料理のお店や個人経営の韓国料理のお店が多く、韓国人は日常的に韓国料理を食べていると感じました。日本は、どちらかといえば洋食の方を多く食べている気がします。街でも和食の飲食店は少なく、洋食中心のファミリーレストランが多いです。韓国料理がとても安価で多くの人が食べやすい特徴があるから韓国人が日常的に食べているのだと思いました。韓国人のように、母国の料理や味を日常的に食べることはとても良いことだと思います。食事その国の文化であり、日常的に食べられ、変わらずに残っていくことは非常に重要なことであると感じました。過去、海外に行くと食事の面で日本食が恋しくなることや口に合わなくて困ることがありましたが、韓国では全く困らなかったことにも驚きました。おそらく、隣の国なのでおいしいと感じる食材や味付けなど味覚に似ているものがあるのではないかと感じました。

今回、留学という形で韓国に初めて行き、韓国の大学生の実情を知ること出来ました。韓国国籍を持つ男性は、20歳から29歳までの間におよそ2年間の兵役義務を行わなければならない徴兵制度があります。韓国では、大学生がちょうどその時期にあたります。学校を休学し、2年間の軍隊生活を控えた学生や、2年間の訓練を終えた学生もいました。既に訓練を終えた学生に少し話を聞くことが出来ましたが、相当辛い訓練だったそうです。これから軍隊を控えた学生も本当は行きたくないと言っていました。日本人の私には、分かり得ない使命感和さまざまな気持ちを持っていることを実際の声で聞き、とても不思議な気持ちになりました。しかし、軍隊へ行ったからなのか韓国の男性を見て日本人にはないたくましさや男らしさを持った男性が多かったです。また、同じ訓練をやり遂げた仲間として団結力があるようにも見えました。

他に気づいたことは、韓国人は高いスペックを持っている人が多いことです。東西大学校では、第2言語を習得している人が非常に多かったです。先生の中では、英語、中国語、日本語などの第2言語を話せる人がほとんどでした。東西大学校の日本語学科の生徒は、1年生にも関わらずほとんどの日本語を理解している人が多くいることにもとても驚きました。以前、私は就職難に直面し「恋愛」「結婚」「出産」「マイホーム」「人間関係」「夢」「就職」の7つを諦めざるを得ない「七放世代」と呼ばれる韓国の若者について書かれた記事を読んだことがありました。韓国の企業は、日本の企業とは違い年齢や新卒にこだわりません。その代わり、その人の学歴、ボランティア活動、語学試験のスコアやスペックを重視する傾向にあると書かれていました。日本人は、第2言語を話せる人や高いスペックを持った人はあまり多くない方だと思います。日本とは違う社会背景があり、さまざまな能力を身に付ける韓国人の努力は日本人も見習わなければならないと感じました。

また、留学という体験は今回が初めてでした。海外は2回目でしたが、2週間という長い期間、海外に滞在したのは初めてだったので未知の世界でした。この留学では、初めて体験することが非常に多かったです。寮に住むことや海外で学校に通うこと、韓国の文化体験で行ったキムチ作りや陶磁器体験など多くの経験で韓国の文化を知ることが出来ました。様々なプログラムがありましたが、韓国人と実際に会話してみることが他の何よりいい経験になりました。自分の今の語力が身にしみて分かる体験でした。私は、正確な韓国語の文法で話すことや発音を意識しすぎていた部分がありましたが、あまり考えずにとりあえず話してみることが語力を身に付ける1番の近道であることもこの留学で知ることが出来ました。この2週間でさらに韓国への興味や韓国語の習得に対する思いが強くなりました。留学が終わってからも自ら語学の勉強に励み、第2言語として身に付けたいです。



私は今回語学研修で韓国行くのは初めてで、大正大学では韓国語の授業を受けているが、現地に実際に行ってみることでより自分の語学力をアップさせることができるのではないと思った。そして、二週間の東西大学への語学研修を通して初めての経験をたくさんすることができた。

まず私が韓国で驚いたことはお店での接客態度だ。私はコンビニのアルバイトをしているのだが、日本の場合はほぼすべての店舗で細かく教育されていて、笑顔や礼儀をしっかりとやらなくてはいけない。しかし、韓国のコンビニはまず店番が1人のところが多く、レジでご飯を食べたり、携帯電話を弄っていたり、電話しながらレジをしていたりしていた。そこに大きく文化の差があるなと感じた。私が二週間よく利用していたコンビニのおばさんは、話しかけてくれたり、優しく場所を教えてくれたりととても親切だった。

もうひとつ驚いたことは車の速度で、韓国に行く前から日本と違って歩行者優先ではなく自動車優先だと聞いていたけれど、車のスピードには本当に驚いた。学校に行くまでの道のりが急な坂だったのに移動のときのバスは結構な速度で坂を下りるので怖いと感じた。車が停車するときも前の車との距離がとても近くぶつかりそうだった。日本よりも道を歩くときは注意していないと危険だと感じた。

東西大学での語学授業のほかに、韓国の文化を体験したり、見たりした。その中でも印象に残っているのは、韓国の伝統衣装チマチョゴリを着たことだ。着物よりも簡単に着ることができた。そして着物より全体的にゆったりしていて軽いので、とても動きやすいと感じた。

食文化では、日本では小皿に分けて食べるのがほとんどだが、韓国では大皿を皆でつつきながら食べることを知った。上の写真の料理は南浦洞に東西大学の日本語学科の女の子たちと行ったときに食べたダッカルビで、皆で食べることで一気に距離が近づいたような気がした。そして韓国の女の子たちと一緒に行動していた気づいたのは、韓国の女の子たちは美意識がとても高いということである。日本だと人の前などでは化粧を直したりする人は少ないと思うが、韓国では食事をした後や、ふとしたときにすぐ鏡を見て化粧直しをしていてびっくりした。また、メイクを気にする若者が多いためか南浦洞や西表などの道を歩いていると洋服の店よりも化粧品の店のほうが多いと感じた。そして比較的安く若者でも気軽に買えるものが多かった。



このように日本と韓国の文化の違いはたくさんあるが、自分が住んでいるところとは違う文化に触れることはとても面白いと感じた。韓国に行くときに周りの人に韓国には反日の人がいたりするなど言われていたが、実際に行ってみると皆親切に話してくれたり、道を教えてくれたりした。私も日本にきている韓国人に同じように接することができればいいなと思った。そのためにはまずは語学を身につけなければいけないと改めて感じた。今回二週間韓国にいたときも、韓国人相手に伝えたいことが伝えられなくて悔しい思いをしたことが何回もあった。日本語学科の学生に助けられることも多々あった。そういう悔しい思いを忘れずに、糧にしてもっともっと勉強したいと思った。韓国で出会った学生とはSNS上でつながっているが、この出会いを大切に日本にきたときには、いろんなことを教えてもらい、助けてもらった恩返しをしたい。

日本で学習するのももちろん身につくけれど、現地に行って韓国語で埋め尽くされる生活は自分を精神的にも成長させて、韓国語を話さなくてはならない環境に行くことで韓国語の上達が早いと感じた。また行く機会があれば行きたいと思う。そして自分から韓国語で話しかけられるくらいの力を身につけておきたいと思う。



今回初めて韓国の釜山にある東西大学を訪れて感じたことは、場所が変われば人の考え方やものの見方が変わるということです。今の時代、インターネットを調べれば、たいていのことは何でも分かるし、同じ先進国であり、気候や地球上の緯度・経度も近く、古くから人の往来があり相互に影響を与えている日韓両国では、それほど大きな生活習慣や文化などの違いが見受けられるようには思えない。

しかし、「郷に入れば郷に従え」という諺を実際に体験した人でなければ得られない感覚があり、その喜怒哀楽を含んだ感情は、言葉にすることが極めて難しいものである。ただ明らかに分かっていることは、異文化体験というものが、相手の立場に立つてこそ、初めて自分の言葉として表現できるようになり、また第三者に語ることが許される貴重な経験になるということである。海外を満喫するということは、その後、自分たちが思い出を共有することに蘇る一生の思い出を作ることである。

今までに世界32の国と地域を訪れた私にとって、韓国の地を踏むことは初めてではなかった。数年前にソウルにも足を運んだことがあったが、しかし釜山はそれ以上に魅力のある都市だと感じた。それは、国際都市としてグローバル化を迎えるために形を変貌させていった首都とは違う、韓国固有の伝統的な味を色濃く残しているようにも思えた。

飛行機を降りて、釜山空港にたどり着いた瞬間に、私の頭の中には一つの疑問がふと湧いてきた。

「釜山という名の山はどこにあるのか？」

東西大学へ向かうバスの中で、日本語学科の学生に聞いてみると、その答えに意表をつかれた。

「釜山に釜山という名前の山はありません。」

その学生によると、釜山の中心地は周囲を山々に囲まれており、それが空から見ると「釜」のように見える。というのが、釜山という名前の由来らしい。また、釜山にある大学はすべて山の中に建っている。その理由を韓国語の先生に聞くと「山は土地が安いから、大学を建てるのに適していた」という回答が得られた。

韓国の食文化は、世界の中でも極めて特殊であり、いかなる食事を注文しても、必ずキムチを中心としたナムル・韓国海苔・おひたしなどといった小皿が8種類ほど無料でついてくる。場所によっては食後のコーヒーまで無料でサービスしてくれるという気前の良さである。韓国料理というと、日本人は辛いものばかりをイメージしそうだが、釜山発祥の料理であるテジクッパ（豚肉のスープにご飯を入れて食べるもの）とミルミョン（麺を甘としょっぱさが絶妙のハーモニーを奏でる冷たいスープに入れて食べるもの）はまったく辛い。また、日本では数年前に法律で禁止されてしまったユッケ（牛肉の刺身をスライスしたものに梨のスライスと生卵をミックスして食べる料理）など、日本には無いバラエティーに富んだ食文化を持つ。鶏肉も日本では焼き鳥にすることが多いが、韓国では鳥一羽を丸ごとフライにして味を付ける、ケンタッキーのような調理法が目立った。また、韓国では一人で食事をするという文化がなく、食事は必ず数人で大きな皿をつついて食べるというものが主流であった。クッパやチゲのように一人前がきちんと別れているときには、無料でついてくる小皿をみんなで共有することで食事を楽しむ。日本が「同じ釜の飯を食う」のであれば、韓国では「同じ皿の飯を食う」のである。なんだか人間関係がより一層親密になった気がしないだろうか。

韓国の言語文化に焦点を当ててみると、その親密さをさらに理解できるようになる。韓国では出会ったその日から、友達に対して「お兄さん」「お姉さん」と呼ぶ。仲がよくなればよくなるほど、家族としての感覚が強まり、よそよそしさが一切なくなる。そのため日本には「親しき中にも礼儀あり」という諺があり、親しい間柄でも感謝や謝罪の言葉にして伝えることが多いが、逆に韓国では、「親しいんだから礼儀を気にしない」という文化があるように思える。そのため年齢の上下に関わらず、関係性が近くなると、言葉遣いが敬語からパンマルと呼ばれるタメ口表現に変わる。また、韓国では「おじさん」という呼称は親戚以外の成人男性に使う表現で、実の親族である父親の兄に対しては「大きなお父さん」弟に対しては「小さなお父さん」という表現を使う。

釜山には歴史のある観光地は多くないが、の中で一番有名なのが「仏国寺」である。1995年にユネスコの世界遺産にも認定されており、小中学生の修学旅行先として定番になっている場所である。私たちが課外活動の一環として観光に訪れた。境内には、10ウオンのデザインになっている「多宝塔」と、その塔を建てさせた頭首が長く生きられずに早死にしたのをきっかけに妻が九品蓮池に身を投げて後追い自殺をして一本の木になったと言われている恋愛成就の木「愛の木」がある。仏国寺には、釈迦如来・阿彌陀如来・毘盧遮那仏が安置されており、国は変わっても仏教の内容とその救いの教えはまったく変わらないんだということに気づかされた。そして、それが何千年の歴史を超えて、途絶えることなく現代にまで脈々と引き継がれていることから、仏教の影響力の大きさを肌で感じた。

その他にも、韓服（チマチョゴリ・パジチョゴリ）を着たり、陶磁器の花瓶に絵を掘ってお土産にいただいたり、キムチづくりやおでんの具になる練り製品づくりや和紙で作る韓国伝統の箱づくりを体験した。どれもかけがえのない思い出で、一生の宝物である。

日本は少子化によって人口が減少するなか、政府は毎年20万人の移民を受け入れようとしている。これから日本国内においても、様々なフェーズでグローバル化が進んでいくだろう。今回の語学研修留学で、今まで日本で培ってきたモノの見方が、必ずしも絶対的なものではなく、世の中には多種多様な角度と基準点から物事をとらえる人がいることを大いに学んだので、これからの人生で、いろんな過去や経歴を持った人と出会うなかで相手を受け入れながら共に生きられる最高の道を模索できるようになりたい。



外国へ行くということは、すなわち日本の常識が通用しなくなるということである。このことをよく覚えておき、今回の研修に参加した。しかし一人の日本民族としての生活に慣れ親しんだ私にとって、全く違う文化を持つ国へ行くということは、日本の文化と容易に文化の比較ができるという利点もあった。その立場をうまく活用し、朝鮮半島で自分が見聞してきたことを、民族の文化を中心にまとめてゆく。

1、朝鮮侵略以前の民族意識

研修二日目に東西大学の学生とともに南浦駅を見学した。釜山は豊臣秀吉の朝鮮侵略のために上陸したところとして有名である。南浦駅の龍頭山公園内に、水軍を率いて日本を追い払った將軍李舜臣の像が立っていた。その像は日本の方向を向いているといわれるが、おそらく日本軍が攻めてきた方向を向いているのだと思う。公園の階段を登りきったところで、海の方を見ると、朝鮮半島の南端が見えた。日本軍が攻めてきた方向から、日本の島の位置を確認したのだろう。朝鮮半島を攻めた豊臣秀吉は、その支配がうまくゆかず、民衆蜂起などにより滞っていた。このころ以前から、かなり強力な民族意識があったと推定できる。

2、ハングルが生んだ民族

南浦駅にある釜山近代歴史館にも足を運んでみた。二日目の見学では時間が足りなかったため、三日目に見学した。日本の帝国主義時代に朝鮮半島を植民地にした当時の資料を展示している。田中氏は、韓国の民族意識について日韓併合以前は中国への事大主義のため、民族意識が存在する必要がなかったと述べているが（田中明 2003）、前述したとおり、民族意識がなかったわけではない。朝鮮半島を支配した日本民族は、朝鮮の人々に日本の歴史、言語、文化を教え、朝鮮民族を撲滅しようとしたという。朝鮮民族は日本民族に支配されまいと訓民正音すなわちハングルの文法を整備し、自分たちの言葉、ウリマルとして掲げた。このことから、民族と文字は切り離せないものと考えられる。例えば日本人の両親を持つ子供が、別の国の歴史、文化、言語を学んで成長したなら、日本人と言えるであろうか。両親が日本人だとしても、子は日本語を話すことはできない、日本の文化に対応することもできないとなれば、別の国の民族として生きていたほうが自然である。民族という枠は非常に脆く弱く、一民族の生み出した言語、言語を生み出した文化、文化を生み出した歴史によって規定されているだけなのである。

3、現代の様子

ある学生が、韓国は10年前の日本みたいと言っていた。観光地として有名でない駅や、人が多く、にぎわっている場所を少し離れると、草だけが生えた土地が多く見受けられる。古代の朝鮮半島の三国の対立や豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に殺害した人の数、日本が植民地にしたとき、どれだけのものを破壊したかを現代に伝えている。また、朝鮮半島は日本と中国に挟まれており、西洋の文化を享受しづらい位置にある。朝鮮半島は日本ほど多くのものはないが、それは半島の位置と戦争の影響であるといえる。

4、文化の必要性

それぞれの国は民族に適合した独自の発展を遂げている。たまた外国の文化を受け入れながら、自分たちにとって都合のよい方法で解釈し、それを民族の文化、特徴であるとする。

文化を一つの国の中で利用するには、大変便利な道具である。同じ価値観を持っている民族であれば、その民族に合わせた社会を形成してゆけばよい。民族の文化に合わないことをすれば、必ず反抗される。国の安定を図るために、民族という枠組みは国を形成する上で必要不可欠である。

おわりに

朝鮮民族が日本人と似ているのはその文化を古代から共有してきたからである。話す言葉が違うだけで日本人であるか朝鮮人であるかを問われることがたびたび起こった。しかし、民族の違いなど些細なものに過ぎない。気温や地形、ヒト、モノの流通など、外部の影響全てから民族の文化は形成される。様々な情報が飛び交う中、どのようにして民族と言う枠を生きたために利用していくか、私にとって朝鮮半島の歴史はその一助となったのである。

参考文献

田中明『韓国の民族意識と伝統』2003年9月17日、岩波書店



【はじめに】

今回、私は昨年に引き続き2回目の参加であった。韓国の語学、文化の2つの項目に分けて、実際に自分が行ってみて感じたことを書いていきたいと思う。

語学

私は、韓国語を学習し始めて2年程度になる。韓国語を学習する上で、日本人が有利だと言える点は、「文法が同じだということ」である。一部の例外を除けば、文の作り方は同じであり、話すときに頭の中で文を組み立てるのが簡単なのである。単語と接続語さえ覚えれば、話せるようになると言っても過言ではない。難しい点といえば、「発音の種類が多いこと」である。平音、濃音、激音など日本語では1つの発音しかない音にも細かく種類があるのだ。そのため、正確な発音を覚えなければ、相手に伝わりにくいどころか、伝わらなくなってしまう。2年勉強しても、まだまだ難しい点が多い。やはり、現地に行って、実際の発音を聞き、2週間集中して勉強することが必要だと考えた。

今回、授業を受けて、日本での語学の授業とのやり方の違いを感じた。それは、「日本は目から入る情報に重点を置いているが、韓国は耳から入る情報に重点を置いている」ということである。今回、受けた授業のやり方が、韓国全体に言える教育方法なのかは不明である。しかし、2年連続で参加して1年目と今年で先生が違う方だったが、授業のやり方は似ていた。日本の語学の教育といえば、今も受けている英語が挙げられる。英語の教育は中学校から本格的に始まったが、常に教科書中心の授業であったと思う。文章を読んだり、単語を暗記して書き取ったりすることに重点が置かれており、スピーキングがあったとしても、教科書の内容をただ暗記して言うという内容であった。英語を中学校から何年やっても話せるようにならないが、それは、教育方法に大きな問題があるように思える。韓国で受けた授業は、教科書もあるが、実際に発音する機会が多くあった。先生の後に続いて、発音したり、1人ずつ教科書を読んだりした。その際に、先生がしきりに言っていたのが「教科書を見ていても出来るようにならない。」ということであった。歌を歌う授業もあったが、歌詞の意味は大まかに習い、あとはひたすら歌うという授業であった。最後は歌詞を見なくても歌えるように練習をした。先生の狙いは、言葉の言い回しと単語を自然に思い出せるようにすることだそう。メロディに乗せて

ふとした時にでも思い出せば、言い回しと単語が自然に入ってきて使えるようになるのである。また、映画やドラマを観ることも歌を歌うことと同じく有効だという。本で勉強をすることも必要だ。しかし、それだけでは飽きてしまう。映画や音楽から学べば楽しく勉強できると思った。今回、耳から入る情報に重点を置いたことで、聞き取りの能力が伸びただけでなく、このまま続けられもっと話せるようにもなると思い、有効な学習方法だったと感じた。

文化

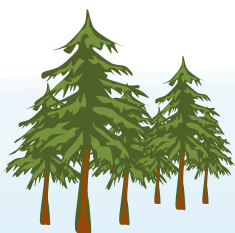
今回は、陶磁器作り、キムチ作りと工場見学、韓服体験など様々な文化の体験をした。私が、その中で最も興味を持ったのは韓服である。韓服は、韓国の伝統衣装で、女性はスカートのような形が特徴の衣装である。日本でいうと着物にあたり、結婚式などの冠婚葬祭にも着られるそう。着物との違いと言えば、やはりスカートのような形状だと考える。着物は足に密着した形をしているが、韓服は足元に行けば行くほど広がった形をしている。また、配色も独特であり、着物は1色の布地に様々な柄で装飾されているが、韓服は上下や袖で何色も色が組み合わされている。その色の組み合わせも、黄色とピンク、赤と緑といった原色で派手な色であるため、その2色を合わせることは思い付きもしないが、絶妙に調和しているのである。

2週間、日常生活を送っている中でも様々な発見があった。韓国では環境保全の取り組みが盛んで、その中でも最も身近だったのが、買い物袋を配らないことである。洋服屋意外のお店では、基本的にどこのお店でも袋に入れずそのまま持って帰る。スーパーでは、袋に10円ほどかかる。日本では、袋をもらえるのが基本で要らないことを伝えるが、韓国では、袋をもらわないのが基本で要れば伝えるというスタイルであった。この取り組みは、日本でも簡単に取り入れることができるのではないかと考えた。スーパーで使うエコバックは日本で浸透しているが、コンビニや雑貨屋では、まだまだ袋をもらうのが当たり前になっている。考え方を少し変えることで、削減することもできると思った。

最後に、食文化についてである。韓国料理には、参鶏湯という鶏肉を煮込んだ温かいスープがあるのだが、現地の方によると、その温かいスープは夏に食べるのだという。夏は冷たいものを多く食べたり飲んだりすることが多いが、温かいものを食べて冷えた内臓を温めることで体が元気になるそう。逆に、ミル麺という冷たい麺の料理は冬に食べるのだということだった。暑いときに熱い料理を食べ、寒いときに冷たい料理を食べる文化は、とても面白く、健康的にも理にかなっていて興味深かった。また、韓国といえば、キムチがとて有名である。やはり、どこのお店に行っても必ずといって良いほどキムチが出てきた。あれほど国民の食事に馴染んだ食べ物は、日本には無いと思った。日本は食が欧米化して、家でも洋食を多く食べる傾向にあるが、韓国では、韓国料理が基本的に多く食べられている印象だった。洋食のお店もあるが、韓国風にアレンジされていたりして、日本とは少し違った食文化であった。

【最後に】

今回、昨年に引き続き2回目の参加となったが、1回目とは違ったプログラムで有意義な2週間を過ごすことが出来たと考える。これからも語学力を向上させつつ、文化についても多くのことを学んでいきたいと考えた。



東西大学短期語学研修を通してこれまで私が持っていた韓国に

対しての考え方、見方がかわりました。テレビ等でよく反日に関するニュースを目にしていたため、実際のところ韓国に対してそんなによくないイメージを持っていました。しかし、実際に韓国に行ってみると私自身が目にしたところではそのようなことはなく、現地の人たちは優しく親切に接してくれました。釜山の街自体も日本人観光客が多いためか日本語で話しかけてくれる人も多く、人柄の良いとてもあたたかい街という印象を持ちました。



今回の研修の中で東西大学の日本語学科の学生がよく私たちの相手をしてくれたことで仲のいい友人もでき、韓国について様々なことを聞くことができました。その中でも特に印象に残ったことは韓国の男性のほとんどの人が約2年間徴兵にいくということです。その友人は厳しい環境の中で厳しい訓練をしたことを思い出すだけでもつらいと言っていました。実際に銃を持って戦地や北朝鮮の近くまで行ったりしたと聞き、同じ世代の日本人には想像もできない体験をしているのだと感じました。韓国では徴兵を経験することが成人男性になるための通過儀礼だということを聞き、同年代の日本人よりもさまざまなことを経験していて考え方がしっかりしていると思いました。

はじめにも少し述べましたが、反日など日本を敵対視している韓国人もいますが、この徴兵制も少なからず関わっていると私は思いました。韓国の徴兵制について気になりいろいろと調べた結果、そもそもの理由は朝鮮戦争による南北分断が原因であるということを知りました。徴兵にいくことで家族・友人・恋人とも離れ離れになってしまうし、スポーツ選手を例にとり上げてみると、2年間という期間競技から離れてしまうのはかなり支障が出るものであり、「徴兵制さえなければ」といった感情を抱くことによって、決して日本が悪いというわけではないと思うが、日本に対して敵対心を抱いたり、反日の人が出てくるのだと思います。歴史は変えることはできないが、これ以上お互いにらみ合うことのないような社会になることを望みます。

この東西大学校での語学研修は今までの自分の人生にはない体験で、充実した日々を過ごすことができたので参加して良かったと思います。実際に韓国に行くことで自分の肌で韓国の雰囲気、文化を感じることができました。今回出会った人たちとの出会いをこれからも大切にしていき、韓国についてもっと深く学んでいきたいと思います。



成果は数字で測れない

報告書の中に、学生たちが強く感じ取っている「世界の中の日本」についてこう述べている。

「グローバル化が進み、日本にしながら世界と繋がることが容易になった今だからこそ、外国に行く必要がなくなったのではなく、むしろ実際に行ってみて自らの目を見たことを、自分自身で考えることがとても重要になってくるのではないかなと思う。井の中の蛙になってはもったいない。」「日本の歴史からも分かる。島国だから、ということを使い訳に、なかなか世界と触れ合おうと行動してこなかった自分が、結局はすごく日本人らしいと思った。日本のことは好きであり、日本人らしい自分も好きだが、今回の経験を通して、もっと日本を知るべきだと感じ、さらに考えるだけでなく行動し世界に触れたいと思った。」彼らの言葉ですべてを語っているように思われる。外向的になれずに「内向化」になりつつある大学生たちが多く中で、このような気持ちを少しでもファシリテートできたなら、私達、国際教育を担当する者としては、今後の学生に示すべき操舵は自ずと預けられたのではないかなと思う。

今後とも、きっかけをすること、学生自らに気づきと発見を大切にプログラムの推進に邁進したいと考えている。

名前 東西大学校語学研修 2016

住所 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学

教務部学修支援課

国際

電話番号: 03-5394-3039

FAX 番号: 03-3918-9179

電子メール: kokusai@mail.tais.ac.jjp

